

ラジオ放送  
＜平成25年1月～3月放送分＞

ON AIR



金光教の声  
No.402



## もくじ ~ contents

### <先生のおはなし>

☞ 金光教の教会の先生のお話です。

- 年頭放送 天地とつながる生き方  
金光教教務総長 岡成敏正 *page 1*
- 剣道師匠からの授かりもの  
金光教高知教会 道願正美 *page 5*
- 神様の願いにかなう生き方を  
金光教墨染教会 松岡光一 *page 9*
- 足裏へ祈りを込めて  
金光教枚方教会 四斗晴彦 *page 13*
- 太るのは、カロリーのせい？  
金光教西宮教会 西村明正 *page 17*
- 今朝も笑顔で  
金光教豊中南教会 水野節子 *page 22*
- おかげで生きています  
金光教尾道西教会 藤井 潔 *page 26*
- 娘の交通事故  
金光教南部教会 白神美恵 *page 30*
- 当たり前の中に  
金光教今治教会 塚本一眞 *page 34*
- 神棚  
金光教白山教会 西野徳雄 *page 38*
- 金魚の看病  
金光教横須賀教会 木本雅史 *page 43*
- 大地に植えたキュウリ  
金光教高蔵教会 田中有希恵 *page 47*
- 海を越えて届いた母の願い  
金光教筑前新宮教会 篠崎道開 *page 51*

年頭放送

## 「天地とつながる生き方」

金光教教務総長 岡成敏正

共々に平成二十五年の新春を迎えさせて頂きました。皆様、明けましておめでとうございませす。

本年は金光教の教祖である生神金光大神様が亡くなられて百三十年というお年柄になります。私どもにとりましては、金光大神様が今もなお、人助けの神としてお働き下さっていることにお礼を申し上げ、一層に成長させて頂くための大切な節年ふしどしと頂いております。

教祖金光大神様は、幕末から明治期にかけて

生きられた方です。元々はお百姓であられました。が、一家の繁栄に力を注ぎながらも、家族の相次ぐ死やご自身の大病などの苦難を経験され、その中で、我が力ではなく、神様のお働きの中に生かされていることを悟られ、次第に神様のお心を感じられるようになりました。

やがて、今から百五十四年前の安政六年、四十六歳の時に、神様から、「世間には多くの人が難儀に苦しんでいる。そうした人々が参ってきたら、神の教えを取り次ぎ、助けてやってくれ。そうすれば神も助かり、人間も立ち行く」とのお頼みを受けられて、自宅を広前として開放し、七十歳で亡くなるまで、お取次による人助けに専念されたのです。

お取次は、金光教の中心生命とも言える働き

です。金光大神様のお取次は、参拝者の願いを神様に届け、参拝者へは神様の教えを伝えて、その方が本当に助かる生き方へと導かれるものでした。そして、ご信心を始められた人の中からも、取次のご用に専念される方が各地に生まれ、今に生きる私たちも、日々、お取次を頂きながら、心の目を開かれ、神様に心を向けた信心生活を進める稽古をしておりますが、当時の方々がどのようなお取次を頂かれ、助かりへと導かれたのかを、求め求めしております。

幕末のころのお話です。現在の岡山市に、二十代半ばを過ぎた利守志野というご婦人がおられ、一人息子の千代吉さんは生まれつき病弱で、九歳の時には肺結核と診断されました。志野さんは、我が子の病氣平癒と体の丈夫を願ってあ

ちらこちらの神仏にお参りされ、祈とう者や易者などにもお願いしましたが、何の効果もありません。やがて、周りの人から生神様がおられると聞き、自宅から約五十キロのところにある金光大神様のお広前にお参りして、我が子のことをお願いされたのです。

ところが、我が子の病氣が治ることをお願いした志野さんに対して、金光大神様は病氣のことには一切触れず、「お日様のお照らしなさるのもおかげ、雨の降られるのもおかげ。人間は皆、おかげの中に生かされて生きている」と言われ、人間が天地のお働き、神様のおかげの中に生かされて生きているという内容のお話ばかりをされました。

最初、志野さんは、「金光様が何を話してお

られるのが、分からなかった」と言います。けれども、そのお話を聞いているうちに、「これは大変なことをおっしゃっている」と思えてきました。そこへ、「人間はおかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくのである」と言われ、志野さんは、がくぜんとさせられたのです。

それというのも、志野さんにとって「おかげ」と言えば、息子の病気が治ることだけを「おかげ」と思っていました。ですから、自分たち親子の命は天地のお働きに生かされ、支え続けて頂いているとか、神様の「おかげ」の中に生かされているということは、考えたこともありませんでした。それどころか、「自分たちはただただ一生懸命に、真つ正直に生きてきたのに、

どうしてこのような目に遭わなければならないのか」と、世を恨み、ついには、神様をも恨んでいたというのです。

ところが、教えを頂かれた志野さんは、次第に、ご先祖様も自分たち親子も、人間の力を遙かに超えた天地の親神様のお働きによつて生かされていたということを、自覚させられてきました。そして、ついには、「これからは改めて、神様にお礼を申し上げる生活に切り替えます。せがれにもよく聞かせまして、これから信心させて頂きますから、どうぞよろしくお願いいたします」と申されたのです。

志野さんは、金光大神様のお取次を頂いて、神様のお働きに生かされ続けているという自分の本当の姿に気付かされ、神様へお礼を申し上げ

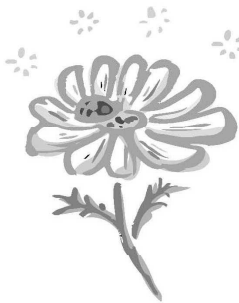
げる喜びの生活をさせてもらわねばと思うほどの、心の大転換をなさったのであります。

こうして「神のおかげ」に目覚めた志野さんは、神様に生かされているお礼と喜びの生活を続けられ、やがて千代吉さんの病気が全快するという「おかげの事実」も生まれたということであります。

私たちは、困ったことや苦しいことに出遭いますと、ともすれば、苦しさや出来事の虜とりこになり、湧き上がってくる喜怒哀楽にとらわれがちな心の癖があるように思います。けれども、私たちも利守志野さんが気付かれたように、問題や難儀に出遭うより先に、万物を生かし育んで下さる天地の親神様のお働きに生かされています。生かされて生きているからこそ、喜ぶこ

とも出来るし、反対に悲しむことも出来、問題にも出遭うのであります。

私たちは、「天は父、地は母である」との教えを頂いています。起きてくる問題に心を惑わされるのが人間ですが、その中であって、まずは、変わるこのない天地のお働きにお礼を申して、親神様と一緒に生きる日々を求め、重ねさせて頂きたい。そのことが、いつの時代にあっても、生きる力、助かる力を育むことになり、幸せを生みだす土台になると、信じております。



# 「剣道師匠からの授かりもの」

金光教高知教会 道願正美

私の剣道の師匠は、剣道日本一に二回もなった人です。その師匠との思い出が、私の二十年

近い学校教員生活の心の糧となり、そして現在、教会で日々勤める中にも、金光教の教えと共に、今の私を突き動かす力の土台となっています。

私の母校は、中学高校一貫校です。私が中学校に入学した時、約五十人もの男女同期生が師匠に憧れて剣道部に入部しました。私もその中の一人だったのです。

けれども、鍛えに鍛え抜かれたせいでしょうか、気に入っていた剣道が、高校時代には嫌でたまらないものとなったのです。とにかく逃げ

回り、さぼりまくった時期がありました。何かチャンスがあれば剣道部を退部してやろうといつも考えていました。そんなことですから、師匠にはたくさんの迷惑を掛け、数え切れぬほど怒られました。

ある日、師匠から厳しく叱られた後、「いいか、剣道は人に勝つことだけが全てじゃないぞ。自分に打ち勝つことを目指すのが、剣道で何より大切なんじゃないか。自分のことばかり考えないで、もつと人のことを考えてみる」と、論じてもらったことを思い出します。

師匠は、誰に対しても差別なしに厳しく、そして一生懸命頑張る者を、たとえ勝てなくても試合に出してくれる人でした。そんな師匠の導きに助けられ、私は剣道を最後まで続けること



が出来ました。高校引退の時の同期部員は男女  
わずか九人となっていました。その中の一人  
となるのが出来たのです。

そして、高校卒業で終わりにしようと思っ  
た剣道を大学でも下手ながらに続け、卒業後、  
母校の臨時教員を一年間勤めることとなったの  
です。臨時教員の終わる三日前、学校から正採  
用の教員として残って欲しい、という話があり  
ました。

ところが私は困ってしまいました。なぜなら  
ば、師匠と一緒に剣道部の指導もお願いしたい、  
ということも聞かされたからです。私のような  
剣道の未熟な者が剣道日本一の師匠と共に剣道  
部の指導をすれば、昔のように師匠にたくさん  
の迷惑を掛けてしまうのではないか、という不

安と心配があったからです。

悩んだ末、師匠に電話をしました。すると師  
匠は私の不安や心配を取り払うかのように、「何  
を言っているんだ。来い！」のひと言で電話を  
切ったのです。このひと言で、私は母校で教員  
を勤め、剣道部を指導することを決めました。

翌日、師匠に会いに行くと、「たくさんいる  
教え子の中でも、まさかお前と一緒に剣道を教  
えることになるとは思わなかったぞ」と笑い、  
「いつかお前は教会の実家を継ぐことになるだ  
ろうが、その時まで共に頑張るぞ。お前にはお  
前の役割がある」と言ってくれたことが忘れら  
れません。

金光教の教えに、「もし、五本の指がみな同  
じ長さでそろっていても、物をつかむことが出

来ない。長いのもや短いのもあるので物がつかめる。それぞれ性格が違うので、お役に立てるのである」というものがありますが、師匠はその教えに通じることを言ってくれたのだと思います。

師匠は、人の個性や得意とするところを見つけてくれて、それぞれに役割を与えてくれました。そして師匠は高校剣道部監督、私は中学校剣道部監督となりました。

それからわずか二年後、師匠は修学旅行引率中の事故で帰らぬ人となりました。

私も修学旅行の引率に師匠と一緒に行くことになっていましたが、ひと月前になって急な学校の事情から学校に残ることになったのです。

師匠と別れてからの私は、ただ剣道を指導す

ることで悲しみを紛らわせていたように思います。

しばらくした時、師匠の親友であった人が、生前、師匠からいつも聞かされていたという私の話をしてくれました。それは、「あいつは剣道はまだまだだが、人がいい。あいつが来てくれて本当に良かった」と、会う度ごとにうれしそうに話してくれたというのです。この話を聞いて、私の心はどれほど助けられたことでしょうか。

また、師匠が、教員になった私に含めるように言ってくれた言葉は、「人を大切にしろ」でした。今になって振り返って考えてみますと、師匠が私に教え伝えたかったことは、「剣道の心と技を磨き、日本一を目指して頑張るこ

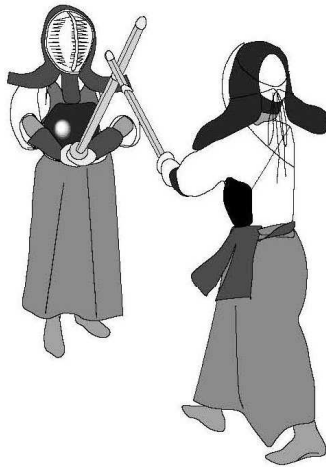
とも大事だが、それ以上に、『人を大切にする心』を磨き、自分の出来る役割を担って、人を助け導く、より素晴らしい人間になりなさい」ということではなかったかと思うのです。

金光教の教祖様は、人を大切にされた方でした。「自分のことは次にして、人の助かることを先にお願ひせよ」という教えもあります。「人を大切にしろ」という師匠の言葉が教祖様の教えと重なるような気がしてなりません。

もうすぐ師匠と別れて、二十五年目がやってこようとしています。

現在、私は師匠との思い出を胸に、人を差別せず人を大切にすることをモットーに教会の仕事と少年剣道の指導を頑張っています。そして、たくさんすばらしい金光教の教えを頂いて、

人のことを祈り助け導く教会の先生を目指し、努力を続けています。



# 「神様の願いにかなう生き方を」

金光教墨染教会 松岡光一

今から二十年前のことです。私の奉仕する教会では、当時八十歳を過ぎた祖父が、教会長として日々の勤めを行っていました。ちょうど、教会設立六十年の記念の年でもあり、教会の建て替え工事を行っていました。

あと二、三日で完成するという時になって、天井に取り付けた大型のエアコンの一台が、うまく作動しないという連絡がありました。風は出るものの、一向に冷たくならないのです。メーカーに問い合わせると、取り付けの際、ほこりか何かが入ったのではないかということ、それはもう取り替えるしかないという返事だっ

たのです。電気工事は、電器店を営むご信者さんがして下さっていたため、教会長の祖父に、すぐにその報告がありました。

祖父は、何とか無事に動き出すように神様にお願いをしていましたが、その後、私達家族に向かって、びっくりすることを言ったのです。

「こういう状況でエアコンが動かない。このままだと、新しい機械に取り替えるしかない。教会にお参りになっている皆さんの真心で出来た建物である。それなのに、まだ使う前からエアコンを取り外すなんていうことは、神様の体に傷を付けるようなものだ。取り外したエアコンは、捨てることになり、業者さんにも負担を掛けてしまう。それに機械といえども、神様のおかげで出来た物である。それを使いもせず

捨てることになつては、神様に申し訳ない。何とか神様にお願いをして、直して頂きたいからお前たちも一緒に祈ってくれ」と話したのです。

長年、神様一筋に生きてきた祖父の言葉ですが、私は、正直戸惑いました。機械が故障して、動かないのです。メーカーの方も駄目だと言っているのです。それを神様にお願いして直して頂くなんて、無理に決まっているじゃないかと、そう思わずにおれませんでした。ですから、祖父に頼まれたものの、神様へお願いをすることなど、とても出来なかつたのです。

工事期間中は、教会からほど近いところにあるご信者さんのお宅を、仮の教会として使わせて頂いていました。祖父は、その神前で一心に祈り、その後、工事現場に行つて、動かない工

アコンの下に職人さんたちに集まつて頂き、無事に動き出すように祈りを捧げたのです。そして、次に室外機の前に移つて、同じように一心の祈りを込めました。そして工事関係者の方に「今、神様にお願いをしましたから、もう一度、試して下さい」と話し、自分は、仮の教会に戻り、神前でさらに神様にお願いを続けたのです。

その後、職人さんたちは、何度も試運転を重ねて下さいました。そこで、一度、機械を逆回転してみようということになりました。すると、何度か試すうちに管から細かい粉のようなものが吹き出て、その後、徐々に冷たい風が出るようになったのです。

工事に当たられた方々の驚きと喜びは、ひとしおでしたが、私はエアコンが直つたことを聞

いて、大きなショックを受けました。あまりにも不思議な神様の働きをまざまざと見せられた驚きと、祖父の神様への向かい方のすごさに圧倒されたのです。世間の常識にとらわれ、神様に心が向かなかった自分との違いの大きさを見せつけられたようでした。

その後も、この出来事を自分の中で消化出来ないまま、何かもんとしていました。そして幾日か経ったある日、祖父にこんな質問をしたのです。

「壊れたエアコンが、神様にお願いで直るのなら、時計やテレビが壊れても、神様にお願いで直るんですか。壊れた物を持って、次々と人が直して下さいと言ってきたら困るんじゃないですか」

そう言うと、祖父は「理屈を言うともうかもしれんが、神様の願いにかなうことなら、何でもかなうんや」と答えたのです。まさか、そんな答えが返ってくるとは思いませんでしたが、「神様の願いにかなうことなら、何でもかなうんや」という祖父の言葉が、何かとても力強い言葉として心に残り、その時、妙に納得出来たのでした。

それからしばらく経ってからのことですが、祖父に、神様への祈り方、願い方について尋ねたことがあります。それは、神様にお願いをしている自分の姿を振り返った時に、「ああして下さい、こうして下さい」と、何か、自分の欲求を満たすために、神様にねだっているだけのような気がして、こんな祈り方で果たしてよい

のだろうかと疑問が起きてきたからでした。

すると祖父は、「神様の願いにかなうように、お願いすればいいんや」と教えてくれたのです。そして続けて「病気を治してほしいというお願いも、ただ早く良くなりますようにと願うのではなく、どうぞ病気を治して頂き、元気な体になって、世のお役に立つ働きをさせて下さいと願えば、それは決して自分の欲をぶつけていることにはならない。商売繁盛を願うのでも、単に自分がもうかりますようにと願うのではなく、この商売を通してお客様に喜んで頂き、世のお役に立たせて下さいと願えばいい。そうすれば、神様の願いにかなう祈りになり、もった力のこもった祈りになる」と話してくれたのです。

神様は、私たち人間を神のいと子として、愛して下さり、どこまでも私たちの助かりを願って下さっています。そして、互いに助け合う生き方をしてほしいとの願いを掛けて下さっているのです。その神様の願いに気付き、沿わしてもらうことが出来た時、自分の願望を超えた、もっと大きな助かりの世界が生まれるのだと、祖父は教えてくれたのでしよう。

神様の願いにかなう祈りが出来ているか。神様の願いにかなう生き方になっているか。今は亡き祖父から教えてもらったこのことが、今もなお、私の中で大きな課題になっています。



## 「足裏へ祈りを込めて」

金光教枚方教会 四斗晴彦

私の奉仕する教会にお参りする康子さんは、今年五十三歳になる女性です。幼い頃から教会にお参りし、ずっと信心を続けています。

康子さんは、二十歳で結婚し、二人の女の子を授かりました。しかし、三十七歳で離婚してしまいます。決断するまで、本当に苦しくて長い長い道のりでした。その時、お参りしている教会の先生からは、次のような金光教の教えを教えてくださいました。

「神様は、人間を救い助けてやろうと思っておられ、このほかには何もないのであるから、人の身の上につけて無駄事はなされない。信

心しているがよい。みな末のおかげになる」

康子さんは、この教えに触れても、決してすぐには前向きになることは出来ませんでした。が、ここからの新しい人生のスタートとして、どこか神様に背中を押してもらったような気持ちになりました。

離婚してから、これからの生活のために仕事を探していた康子さんは、葬儀会社の案内係として就職することが出来ました。その葬儀会社では、案内係の仕事をこなす中で、大切な人が亡くなり、悲しみにくれる人たちに対して、どのように接したらいいのかを少しずつ覚え、人の心の痛みが分かる人間に育てて頂いているんだなあと感じました。

案内係の仕事は、ずっと立ちっぱなしです。



仕事が終わると足がむくみ、腰も痛くなります。

康子さんは、いつしか足のマッサージを受けるようになっていました。マッサージを受けると、足のむくみがすーっと引いていき、何ともいえない心地良さを感じます。この時は、マッサージってすごいなあと漠然と感じていましたが、これがマッサージとの出会いとなりました。

そんな時に康子さんは、足裏のマッサージを特集していたあるテレビ番組を見たのです。

「これだ！」と、自分の天職を神様が教えてくれたかのように感じ、また腰の痛みもあって、思い切って葬儀会社を退職し、足裏マッサージの学校に通うことに決めました。その数カ月後には、無事に資格を取得することが出来たのです。

しばらくしてから、縁があつて近所の病院のスペースを貸りて、足裏マッサージの仕事が出来ることになりました。その病院は、自宅から歩いて数分の距離にあります。近くで仕事を見つめることが出来ればと、ずっと教会で願ってはいましたが、まさかここまで近い所で働くことが出来るとは思ってもいませんでした。すぐに、その病院で働かせて頂くことにしました。

いよいよ、念願だった足裏マッサージの仕事の始まりです。最初は、ほとんどお客さんいませんでした。少しづつ、マッサージを受けて下さる方が出てきました。もう、うれしくてうれしくて、全身全霊を込めて取り組みました。足裏をマッサージしていると、「ああ、この人は疲れているなあ」とか、「ああ、この人は、

落ち込んでいるなあ」とか、足の裏を通して、その人の体や心の状態が伝わってきます。そんな時には、心の中で「早く元気になって下さいね」という気持ちになれずにはおれませんでした。

そんな状態の人が続いたこともあり、康子さんは、足裏マッサージを通して、まずは、目の前にいる人のことを一生懸命に祈る稽古をしよう、と決めました。「私が導かれるように足裏マッサージの仕事をしているのは、人を祈ること、その尊さを神様が教えてくれようとしているんだなあ」と感じたのです。

それからは、どんな人でも、その人が明るく元気に毎日を過ごせるようにと、神様に祈りながらマッサージをしました。うつ状態で苦しん

でいる人や、人間関係で悩んでいる人からは、しっかりとお話を聞き、そのことを教会に参り、神様に祈るようにもしました。

苦しんでいた人が、マッサージが終わって、「何か心が軽くなったわ」と明るい表情で言ってくれた時には、「祈りが少しずつ伝わっているのかなあ」と少し照れ臭く、うれしく感じました。そんな日々を送りながら、祈りの対象は、目の前にいる人だけではなく、その人の家族や周りの人々にも、少しずつ広がっていったのです。

ある日、自律神経失調症で悩んでいる年配の女性の方がマッサージを受けに来ました。その人は、見た目は全く正常で、とても重い症状を抱えているようには見えません。しかし、マッ

サージをしながら、病氣のことを聞いたり、身の上話をしていると、その方の苦しみがじわじわと伝わってきます。

康子さんは、いつにも増して祈りを込めるようになっていました。康子さんが、金光教の教会にお参りし、人のことを祈る稽古をしていることも伝えました。その方は、少しずつ病気から回復されていかれる中で、ある日ふとこんなことをつぶやかれたのです。

「私は、康子さんのように、みんなのことを祈ることは出来ません。でもね、何か自分の家族など身近な人のことは、最近、祈らせてもらうことが出来るようになったんですよ」

特定の宗教を信仰している人ではないのですが、人を祈ることの尊さを感じてもらえたこと

に、康子さんは本当に大きな喜びを感じました。

康子さんが離婚を機に新しい人生へ踏み出した日から十六年。人の痛みを感じる人間、さらには、人を祈ることが出来る人間に、神様から育てて頂いたのです。

今では、二人の娘も結婚し、孫が二人生まれました。おばあちゃんになっても、康子さんは、足裏をマッサージする日々を続けています。



「太るのは、カロリーのせい？」

金光教西宮教会 西村明正

ある日、テレビのバラエティー番組を観ていました。

いわゆるトーク番組と呼ばれるもので、番組の司会者が、数名いる出演者たちに向かって質問をしたり、互いに冗談を交わしたり、失敗談を語り合ったりと面白おかしくトークをすることで番組が進行していきます。

出演者の中には、一人の若いお坊さんが混じっていました。ぼっちゃりとしたふくよかな体形の、ユーモア精神にあふれたお坊さんでした。

番組が始まってしばらくして、司会者が、

このお坊さんに向かって、「最近、何か悩み事がありますか？」と質問をしました。すると、お坊さんは、ちゃめっ気たっぷり、こう答えたのです。

「仕事柄、お菓子などの頂き物が多いでしょう。仏様のご利益で太っちゃって、太っちゃって、困るんです」

すかさず隣に座っていた別の出演者が、「いやいや、太ったのは仏様のご利益じゃなくて、カロリーのせいでしょう！」と茶々を入れて、会場は大爆笑となりました。

私もテレビの前で笑いながら、しかし同時に、「ああ、このお坊さん、いいことを言う

なあ」と感心したのでした。

私たちは普通、この茶々を入れた出演者のように、「太る原因はカロリーだ」というような考え方をしています。つまり、食べ物を食べると、その中に含まれている様々な栄養素のおかげで、私たちは太ったり、健康を維持したりすることが出来る。ビタミン、ミネラル、脂肪、タンパク質、炭水化物……。多種多様な物質の働きによって、私たちの毎日の体は作られている。そのように考えます。

もちろんそれはその通りなのですが、しかし、こういうこともあると思うのです。たとえば、同じ食べ物を食べていたとしても、みんながみんな、毎回、同じだけの栄養を取り

入れることが出来るとは限りません。

同じ条件の元にあつたとしても、ある人は栄養をたっぷり吸収出来るけれども、また別のある人は残念ながら、そうはならないということもあります。同じ一人の人間の中であっても、昨日は良かったけれど今日は駄目だということもある。年齢や性別などの個人差にもよるでしょうし、また、その時々々の体調によっても変わってくることでしよう。

私は数年前から、サボテンを育てています。小さな鉢植えのミニサボテンを、五つ、六つ、部屋の窓辺に並べていて、毎日楽しく鑑賞しています。

私は、どのサボテンに対しても等しく愛情をかけて、水やりをしているつもりなのですが、ところが、どうしても育つサボテンと、そうではないサボテンとが出て来てしまいません。

隣り合わせで並んでいる同じ品種のサボテンであってもそうなのです。土も水も太陽の光も、条件は皆同じはずなのに、一方は育つけれどもう一方はそうならない。そういうことがしばしば起こってくるのです。

おそらくは、ほんのちよつとした日当たりの違いだとか、水の量のわずかな差、土に含まれている養分のばらつき、気温、湿度……。こういった様々な要素が複雑に絡み合い、わ

ずかな違いが重なっていくことで、最終的に大きな違いとなつて現れてくるのだと思います。

私たちの体を形作っているものは、物質によるものかも知れませんが、その物質の組合せや働き合い、そういったミクロの世界にまで考えを及ばせていくと、これはもうほとんど人知を超えた世界です。

今、こうして生きている私たちは、人知をはるかに超えた不思議な働きによつて、生かされて生きていると言えるのではないでしょうか？

そう考えていくと、お坊さんの言った「仏様のご利益で太る」という言葉も、単なる冗談などでは決してなくて、「まさにその言葉

通りであるなあ」と私には思えたのです。

金光教では、私たち人間を始め、あらゆるものにいのちを与え、育むこの天地自然の働きを、天地金乃神様と仰いでいます。

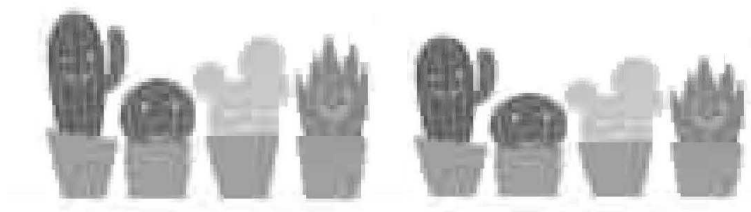
金光教の教祖、金光大神様は、「天地金乃神のおかげは世界にいっぱい満ちている。そのおかげがなければ空気がないのと同じで、人間は一時も生きてはられない」と教えて下さっています。

私たちが生きていく上では、バランスの良い食事を心掛け、様々な栄養素の恩恵を受けていくことは、必要不可欠なことです。しかし、食べ物ほただ口に放り込んだだけでは、私たちの血肉とはなりません。仮に、たくさ

んお金を積んで、栄養価の高い食べ物を体いっぱいに取り込むことは出来たとしても、そこから先、その食べ物が私たちの血となり肉となるかどうかまでは、人間の力は及びません。やはり、私たち人間は、この天地にいっぱい満ちている恩恵を受けることなしには、一時も生きてはられない存在なのだと思います。

このように考えると、毎日の食事に対して、また少し違った態度で向き合えるのではないのでしょうか？ 食べ物を口に運ぶ時、それはただ栄養素を飲み込んでいるのではなくて、この世界にいっぱい満ちている天地の神様の恩恵をも一緒に飲み込ませて頂いている

のだ。そのような気持ちになって、健康な体  
にならせて頂きたいものだなあ、と私はしみ  
じみと思うのです。





## 「今朝も笑顔で」

金光教豊中南教会 水野節子

遠い九州から大阪の教会に嫁いで三年が過ぎたころ、先の東日本大震災が発生しました。

私はこの震災で石巻に住む大切な友人を亡くしました。告別式への参列で被災地の様子を目の当たりにした私たち夫婦は、亡くした友人への思いも募り、金光教青少年少女会東日本復興支援団の活動に参加しました。

被災者の方々から直接、避難生活についてのお話を伺い、日頃の地域との繋がりがいかに大切かを学んだ私たち夫婦は、地元大阪に帰ってから、早速、自治会長さんや、商店街を取り仕切る理髪店の店長・徳夫さんにそのことを報告

しました。そして、それがきっかけとなり、理髪店の徳夫さんと、地域の防災や救命救急について話し合うようになりました。

私がかつて一般の企業に勤めていたころ、赤十字ボランティアとして救急法の普及活動に参加していたことから、嫁いでも「地域の人に救急法を身につけて頂きたい」という願いがありました。教会へ嫁いでも、その活動からも離れ、その念願は叶わぬ夢となっていました。この徳夫さんとの出会いを機に商店街の人を対象に救急法の講習会を開催することが出来ました。会場選び、人集めも、すべてこの徳夫さんの後ろだてです。

人のお役に立ちたいと願う徳夫さんは、毎年地域で開催される盛大な夏祭りの仕掛け人でも

あります。

初めて来た人が、「今時珍しくにぎやかなお祭りや」と驚くこのお祭りは、遊びも食べ物も五十円から百五十円と激安。特設ステージでは、ダンスや歌など盛りだくさん。徳夫さんは、子どもたちがわずかなお金でたくさん楽しめるようにと、数カ月も前から週に一度の休みを利用して物品の準備に駆け回ります。遊具もすべて徳夫さんの手作りです。お手伝いに来る若者たちに、ごちそうしては徳夫さんは嬉しそうです。

今年是我们夫妇也徳夫さんに誘われ、夏祭りのスタッフとして参加しました。炎天下、スタッフの汗と努力が子どもたちの笑顔に繋がります、夏祭りは大盛況でした。救急法講習会の開催、夏祭りへの参加と、私は徳夫さんに支援し

てもらったことがうれしく、お礼をと思うのですが、徳夫さんは、「喜んでくれるだけでいいよ」と言います。

徳夫さんは髪は金髪で、体格も良くて、一見ヤンキーのお兄さんにも見えますが、役所など交流関係が広く、人情に厚いためか、困っている人に頼まれたらじっとしていられます。理髪店は、お客さんでなくても彼を慕って集まる人で賑わっています。「若者不足」や「不景気」とは無縁です。

徳夫さんは、「まずは自ら動いて誠意をみせる。人にお願する限り自ら3倍ぐらいこなさないとかかん、と自分自身肝に銘じてます。少しずつ皆さんが喜びを分かち合えれば良いじゃないですか、たくさん笑顔あふれる街になれば

良いと思うよ」と話してくれます。

一方で、教会の近所にお住まいの自治会長さんも、「町内の若者は自分の子ども、ちびっこは自分の孫、あなたのことも息子のお嫁さんのように思うのよ、町内の皆が喜んでくれたらうれしいの」と、人知れず早朝から町内の掃除をしたり、自治会の行事に力を尽くされています。おかげで地域の活動も活発で、自治会長さんの周りにも喜ぶ人が集まります。主人は、震災後から積極的に自治会のお手伝いをさせて頂くようになり、今では自治会の防災部長として活躍しています。

金光教には、自分のことは次にして、人の助かることを先にお願ひせよ。そうすると、自分のことは神が良いようにして下さる、という教

えがあります。人の喜びが自分の喜びである徳夫さんと自治会長さん。人を助けることで、喜ぶ人に囲まれて幸せそうなお姿は、まさにこの教えのようだと思います。

こうして、震災で親友を失ったことを通して、徳夫さん、自治会長さんと出会い、その生き方に学び、地域との交流を深めるようになった私たち夫婦。人それぞれ、持ち場・立場がありますから、誰しも徳夫さんや、自治会長さんのようには動けません。しかし、真似事まねごととまではいなくても、私たち一人ひとりが仕事場や何気ない日常生活を通して、人の助かりにつながることを、何か出来ると思うのです。

例えば、電車で席を譲ったり、急いでいる人に道を空けたり。ほんの少しだけ、自分のこと

より人を優先することを心掛けてみる。また、朝のあいさつでも良いかもしれませぬ。

私たち夫婦は、毎朝玄関を開けると、金光教の本部のある岡山に向かって祈りを捧げます。祈りが終わると、前の通りのゴミ拾いをします。ゴミ拾いをしながら、毎朝通学・出勤される方にあいさつをしますが、お互い名前さえ知りませぬ。それでも、毎日あいさつを交わすことで随分顔見知りの方が増えました。

先日、毎朝顔を合わす方と、町でばったり出会いましたが、お互い自然にあいさつが出来ました。「あの人誰?」「朝、あいさつしてくれる人」という会話が聞こえてきて、とてもうれしく思いました。

人の助かりを祈り、ゴミを拾い、こちらから

あいさつをすることで、私はこんなにも幸せを頂いています。

今朝も笑顔で、「おはようございます。行つてらっしゃい」と声を掛けます。ゴミの無い通りを気持ちよく通学・出勤して頂ければとの思いを込めて。



# 「おかげで生きています」

金光教尾道西教会 藤井 潔

今から十八年前（平成七年）のことです。私は、同じ肝臓の病気で苦しんでいた兄を失うことになりました。

共に病状を連絡し合いながら、励まし合っていた兄の死は、大きなショックでした。このことは私の主治医にも報告し、相談もしていました。そして平成十七年、私の肝臓にもがんが発見されることになったのです。

それは、その年の一月のことでした。兄が亡くなってから十年が経ち、その節目のお祭りをお仕えさせて頂きました。その折、兄嫁である姉からは、私の病状を問われ、「決して主人の

ようなことにはならないように」と言われていたのです。

そして三月に入り、その月の検診を受けた翌日、主治医から電話を頂きました。前日の血液検査では肝機能の数値も正常でしたが、それでも主治医からの突然の電話は、あまりうれしいものではありません。緊張しながら受話器を取ると先生は、「昨日の肝機能は問題なかったが、実は検査に併せて腫瘍しゅようマーカーによるがんの検査もしており、その数値が高い。心配ですから近いうちにCT検査を受けに来て下さい」とのことでした。早速に、翌日の検査を予約しました。

次の日、CT撮影を終え、誰もいない廊下で待っていると、検査技師が写真を抱えて診察室

に入っ行って行きます。続いて名前が呼ばれ部屋に入ると、机の上にはCT写真が貼られ、先生が見入っています。

すでに肝炎を発症して、その治療を二十年近く続けていますと、それは見慣れた光景で、何がどこに写っているか、自分の肝臓の形状ぐらいは一目で分かります。肝臓の異常に気付いたのは、ほぼ先生と同時に思ったと思います。

しばらくの沈黙の後、「これはがんですね。お勤め先に近いこの病院よりも、あなたの自宅は尾道ですから、そちらの総合病院を紹介します。手術はそちらで受けて下さい。いいですね」ということでした。

これまでお世話になってきた先生の言葉に、私は、「はい」と答えるだけでした。それは有

無を言わせぬがんの告知であり、同時に的確な今後の治療方針の提示でもありました。

「これは兄からおかげを頂いたなあ」というのが、その時の正直な思いでした。すでに話しましたが、兄の死に際して、私は主治医に、治療を受けていながら手遅れになったことに、「こんなことがあるのか？」と問うたのでした。その時先生は、「私だったらそうはさせない」と言われたのを思い出したのです。十年前のこの約束を先生はずっと守り続け、今回の発見につながったのです。先生への感謝と共に、先日、兄の十年祭を仕えたばかりでしたので、亡き兄からのプレゼントと思えたのです。

私のがんの発見は、不安の始まりというよりも、私を守り続けて下さった先生と亡き兄の祈

りという大きなおかげの発見から始まったので  
す。

早速、先生の指示に従って転院の準備に移り

ます。入院、そして手術のため、仕事上での日  
程調整と家族への告知です。金光教の教会で教  
師をしながら、通勤で教団の仕事に当たってい  
た私は、紹介状を持って地元の総合病院に転院、

手術を担当する外科医の診察を、妻と共に迎え  
ることになりました。妻はそこで初めて私のが  
んという現実と向き合うことになったのです。

すでにこれまでも、肝炎治療のため数回に  
わたり入院経験はありますが、今回はその終着  
駅とでも言うべきがんの発見です。こうした入  
院のたびに言い尽くせぬ程の心配を掛けてきた  
妻に、本当のことを告げることは出来ず、「と

にかく転院して新たな治療を受けることになっ  
たので、一緒に来てくれ」ということで、彼女  
は診察室に入ったのです。

説明のため、先生がCT画像の解説を始めた  
時でした。私の後ろで聞いていた妻は、はつき  
りと写るがんの姿を見て、椅子から崩れ落ちて  
しまったのです。

「奥さん、大丈夫ですか？」と言う先生の声  
に振り返った私は、妻の姿に、驚かせて済まな  
いという気持ちと共に、「ありがたいなあ」「も  
つたいないことだなあ」という思いで胸がいっ  
ぱいになりました。

自分のことのように、いや、自分のこと以上  
に心を痛めている妻の姿に、私は、この人によ  
ってここまで支えられ、生きてこられたのだな

あ。ありがたいことだなあ。私はがんの発見によつて、「わたし」といういのちを、生かし支えてくれている妻という存在に改めて出会うことが出来たのです。

その後、手術は順調に進み、一回目の手術では、肝細胞がんの摘出切除のおかげを頂き、ご多分に漏れず転移の末、一年半後に二回目の手術を受け、転移した副腎一つを切除しました。

そして、その二年半後には、三回目として、胆管内転移により肝臓の右半分の切除手術を行い、今日に至っています。

私は毎回毎回、迷惑ばかり掛ける難儀な存在なわけですが、その私を支え、助けて下さる様々な働き、家族や医療に携わる人々、そして私を生かしている様々な恵みと出合わせて頂いた

連続だったように思えるのです。

金光教には、「難はみかげ」という教えがあります。人間は生きていくと、様々な問題に出合います。その問題と向かい合っていく中で、私たち自身を支え、生かしている様々な祈りや働きに出合うこと、気付くことがあります。

この、私たちの背後で、黙って静かに支えてくれている働き、祈り、それを金光教では、「神様」と呼んでいます。ですからわたしの妻は、「お神様です」。





## 「娘の交通事故」

金光教南部教会 白神美恵

心配していたことがついに起こりました。長女の乗っていたバイクと乗用車が接触事故を起こしたのです。

二〇〇六年六月十五日は、朝から雨でしたが、夜になって風が出て、台風のような降りになりました。当時、看護専門学校の三年生だった長女は、隣の学校までバイク通学をしていましたが、その日はいつも帰宅する時間になっても帰ってきません。

激しい雨なので、どこかで雨宿りでもしているのかなとも思いましたが、それにしても遅くなるのなら、メールが来てもおかしくありません

ん。不安になって、どうしたものかと思っていた時、電話が鳴りました。あわてて取りますと、「…お母さん…事故ったわ…」と震えた声の娘からの電話でした。電話が出来ていることにひとまずは安心して、主人に電話を替わりました。

長女からの連絡を受けて、主人は早速現場に駆け付けました。主人が駆け付けた時には、長女は乗用車の横に立っていたそうです。それまでの時間、大雨の中でさぞかし不安であったろうと思います。

乗用車を運転していた若い男性は、長女をはねたショックで黙り込み、駆け付けたお母さんが心配そうに、息子さんに寄り添っておられたそうです。

事故は、男性の車が細い脇道から広い県道に

入ろうとした時、一時停止せずに進入したことで起きたようです。県道をバイクで走行中だった長女は、雨のためにいつもよりスピードを落としていましたが、「あっ！」と思った時にはもう当たっていたと言っておりました。

長女は車にボンと押し出されたような格好で弧を描くように宙を舞い、現場から六〇七メートル離れた芝生の上に落ちたそうです。大雨が幸いして、いつもより多くの水を含んだ芝生がクッション代わりになり、思ったよりも軽い傷で済みました。

バイクは横転の末、回転して二〇三十メートル先でボロボロになって見つかりました。すぐそばには、コンクリートの電柱が建っていて、飛ばされていなかったら直撃していたかもしれ

なかったと聞き、よくぞ飛んでいってくれたものだと手を合わせました。

後日、警察の確認のために当事者の二人が呼ばれて現場での聞き取りがありましたが、双方食い違うこともなく、車側もミスを素直に認め、長女は優先道を走っていたとはいえ、確認を怠ったことに注意を受けて、円満に収束しました。検査の結果も異常なく、日が経つにつれて打撲の痕があちこちに出てきましたが、一週間程で普段の生活に戻ることが出来たのです。

思い返しますと、あの夜が台風のような雨風であったこと、空中に投げ出されたこと、そして落ちたところが芝生であったことなど、私はどれも全て神様が守って下さったと思えてなりませんでした。

長女は、どちらかといえば、おっとりとしたのんびり屋で、まさか看護師の道に進むとは夢にも思いませんでした。看護師のお仕事は、医療の知識に加えて、十分な体力と気力がないとなかなか出来るものではありません。長女は、私に似て疲れやすい体質でしたので、心配でたまりませんでした。

学校から帰りましても、疲れて食事もせず眠って朝に慌てて出ていくことも度々ありましたし、実習が始まった三年生になるとレポート作りのために徹夜状態で通学することもあり、そんな様子を毎日見ているのは本当につらいことでした。

朝、出掛けてから帰るまで、心配ばかりが心の中に渦巻き、子どもとの会話も、「大丈夫な

の？」とか「一日ぐらい休んだら？」というもののばかりであったように思います。考えてみれば、長女は一度も弱音を吐かず、本当に頑張っていましたのに、「看護師の仕事は娘には無理」という私の先入観と、子どもを無視した決め付けを親心だと勘違いして、それを振りかざしていたように思います。

実は、長女が事故で芝生の上に落ちた時、しばらく気を失っていたのですが、気が付き、自分の体が動くことが分かった時、「『金光様、有難うございます！』と真っ先に思ったんだ」と話してくれました。これを聞かせてもらった時に、この子はこの子なりにちゃんと信心をしてくれているなと思いました。

それに引き替え私はどうか。本当に恥ずかし

いことでもあります。長女はあの状況でちゃんと感謝の気持ちを忘れずにおりましたのに、私は心配ばかりの毎日を送っていました。

金光教には、「心配は体に毒、神様にご無礼。

今日からは心配する心を神様に預けて、信心する心になるがよい。おかげになるぞ」という教えがあります。長女の交通事故を通して、自分のあり方を見直す時間をもらいました。

長女は今年で看護師として六年を迎えます。

あのように体力がないと思っていましたのに、一日も休まず勤めさせて頂いております。これからも心配を願いに变えて、お礼の言える生活を共に歩んで行きたいと思っています。



## 「当たり前前の中に…」

金光教今治教会 塚本一眞

皆さん、おはようございます。

病気になって初めて、健康のありがたさが分かると言います。

以前、ある方が大病を患い、長期入院を余儀なくされました。苦しい入院生活が続き、半ば死を覚悟するほどの心境になったそうですが、

適切な治療のあいあつて徐々に回復していきました。数カ月経ったある日、初めて散歩の許可があり、冬の柔らかな日差しを浴びながら病院の庭を歩いていると自然と涙があふれたと言います。

「ありふれた景色を自分の目で見ること、あ

りふれた場所を自分の足で歩くことがこれほど素晴らしく、ありがたいことだったのか。そして、これからは欲張りなことばかり言わずに、今あることにもっと感謝できるような人間になろう」と決意されました。

しかし、その後、退院して元の生活に戻ると、あれほどの感動やありがたいさが薄れ、健康なところが当たり前になってしまったと反省されました。

金光教の教祖、金光大神様の教えに、「痛いのが治ったことだけがありがたいのではない。いつも健康であるのありがたいのである」とあります。

いつも健康であるのありがたいことは頭では分かっているつもりでも、どれほどの実感を

持つてありがたいと感じているだろうかと自問してみると、日常の忙しさにかまけて、ついっ感謝の心がおろそかになっています。大切なものほど身近にあり、目に見えにくいものなのかも知れません。

数年前、ある老人ホームでボランティアをさせて頂いた時のことです。目の不自由なお年寄りの方々とゲームをしたり、一緒に歌を歌ったり、楽しい時間を過ごしました。ちょうどお正月の時期だったので、入所されているお年寄りお一人お一人に新年の抱負を語って頂きました。

ある人は「もっと歌が上手になりたい」、またある人は「今年も元気に過ごしたい」と抱負を語る中、最後に口を開いた男性がおもむろに、

「抱負というか、これは私の願いですが、たった一度でいいから、孫の顔をこの目で見てみたい」とおっしゃったのです。私は思わず息をのみました。生まれつき目が見えないと言われるその男性の「…たった一度でいいから」という切に願う希望を、私はすでに叶えてもらっているのです。目が見えるということ一つ取ってみても、当たり前なことではありません。

何かを無くした時に、人は初めてそのありがたさが分かりますが、無くす前に、教えにふれて、そのありがたさに気づくことが出来れば、より良い人生を送ることが出来ると思います。ここで、このラジオをお聞きの皆さんと一緒に、今あることの有難さを、頭ではなく、心と体で感じて頂きたいと思います。

まず始めに、大きく深呼吸をしてみましよう。  
はい、息を吸って下さい。はい、吐いて下さい。  
心が落ち着きましたか？

では、まず両手を上に挙げて、頭を優しく触  
って下さい。皆さん、触りましたか？ まだ恥  
ずかしくて触っていない人はいませんか？ そ  
れではまいります。

頭さん頭さん：いろいろ考えることが出来て  
ありがとうございます。ありがとうございます。  
次はそのまま下に行つて、目を触って下さい。  
お目々さん、お目々さん：世の中を見ることが  
出来てありがとうございます。次は鼻にいきま  
す。お鼻さん、お鼻さん：いろんな香りを嗅が  
せて頂いてありがとうございます。次は口にい  
きます。お口さん、お口さん：おいしい食事を

頂くことが出来、いろいろお話し出来てありが  
とうございます。次は、手を横に移動して、耳  
を触って下さい。お耳さん、お耳さん：いろん  
な話や音を聞かせて頂いてありがとうございます。  
す。

次は、自分を抱き締めるように両腕を触つて  
下さい。お手々さん、お手々さん：いろんな物  
や料理を作れてありがとうございます。次は、  
心臓を触って下さい。ドクドクドクと動いてい  
ますか？ 止まっている人はいませんか？  
お母さんのお腹の中から今まで一度も休むこと  
なく動き続けている心臓さん。体中に血液を運  
んでくれています。

次は、お腹さん、胃さん、肺さん：ありがと  
うございます。排泄はいせちのことを大便、小便と言い

ますが、あれは天地の親神さまからのお手紙です。

す。大便是大きなお便り、小便是小さなお便りと書き、目に見えない体の中のことをお便りで教えてくれます。毎日のお通じありがとうございます。

では、次に足を触って下さい。足さん：いろんなところに行かして頂いてありがとうございます。

最後に自分自身をギュッと抱き締めて下さい。ご先祖様から脈々と続くいのちの流れの中で、今この瞬間を生きているお互いです。

「感謝しましょう」「ありがとうございます」と口では言いますが、実際、心臓の鼓動を感じたり、直接、体を触ると、より実感としていのちの働きを身近に感じる事が出来ると思いま

す。

「自分の体」と思っている人がほとんどですが、呼吸、血液の循環、食べ物の消化、排泄など、どれ一つ取ってみても自分の力で出来るものがあるでしょうか？ やはり生かされて生きているお互いだと思います。

皆さん、夜寝る前にでも、頭の先から足の先まで触りながら、「今日も一日ありがとうございます」と体をいたわってあげて下さい。そうすると、いのちも体も喜んでくれると思います。

「痛いのが治ったことだけがありがたいのではない。いつも健康であるのがありがたいのである」

最後までお話を聞いて頂いてありがとうございます。



皆さんにとって、今日一日が素敵な一日  
となりますよう、お祈りさせていただきます。

## 「神棚」

金光教白山教会 西野徳雄



私は以前、住宅のリフォームや電気工事等を  
請け負う会社で営業の仕事をしていました。一  
般家庭はもちろん、会社など、仕事で訪問した  
件数は三万件にも及びます。

私は、その訪問先でまず一番に気になること  
がありました。それは、神棚が祭ってあるかと  
いうことです。なぜ神棚が気になるかというと、  
私は幼いころにあることを経験したからです。

それは今から約五十年前のことです。現在、  
私が奉仕している教会の道一本隔てた所に小学  
校がありました。そのグラウンドの砂場で、当  
時五歳だった私は、一人で遊んでいたのです。

その時、突然、「地割れがするぞー！」との大きな声が聞こえました。私は不思議に思っ、周りを見ましたが、どこにも人影はありません。とっさに自宅である教会に向かつて一目散に走りました。

距離にして二百メートルぐらいあります。グラウンド横の門を出て、校舎の裏道を走りながらも、その時、地面が激しく揺れているのが分かりました。後方では、三階建ての鉄筋コンクリートの校舎が屋上の方から崩れ、コンクリートのがれきが次々に落下しています。

私が教会の玄関に飛び込む寸前には、小学校と教会を隔てている道路が、幅六メートル、長さ五メートルにわたり、すっぽり陥没して、そこから地下水があふれ出しておりました。

命からがら教会にたどり着き、建物の中に入った時、お祭りしてある大きな神棚が見え、「助かった、助けて頂いた」と、実感出来たことを今でもハッキリと覚えています。それは、自分の家には神様がお祭りしてあるということ初めて気付かされた時でもありました。砂場で突然聞こえてきた、「地割れがするぞー！」という声は、神様が私を助けるために聞かせてくれたのではないかと思いました。

そのころの私は、毎朝母に連れられて、私が奉仕する教会と縁のある金光教新潟教会に十五分くらい歩いてお参りをしておりました。眠い目をこすってぐずる私に手を焼きながらも、母は連れて行ってくれました。

母は、毎日神様にお礼を申し上げ、人の助か

りを祈っていました。私にとっては神様にお参りするより、母と一緒にいられるうれしさの方が大切でした。

いつしか早起きは私の楽しみとなり、毎日の習慣になったのでした。神様のことなどは何も分からず、ただ人の力を超えた大きな働きを持った方がこの世にはいるらしい、と子ども心に感じていた程度だったと思います。

そうした中で、この地震の体験は、神様に対する祈りや願いがひとごとではなく、現実に分の命や自分自身の日常生活と深い関わりがあるのだということを気付かせてもらった出来事でもありました。

幼い時のこの体験がありますから、仕事で事務所を訪問すると、お祭りしてある神棚に自然

と目がいくようになりました。神棚があるとは限りません。無い所もあります。また、せっかくお祭りしてあっても、ほこりをかぶっていたり、お供えのさかき榊の葉っぱにクモの巣が張っていたり、あるいは、すでに葉っぱが枯れ落ちてしまっていることもありました。「はて？　ここで働いている方々は、この神棚に気が付いているのだろうか？」と、思うこともありました。

一般のご家庭に訪問させてもらった場合にも、同じように拝見しますと、あまり人の目に触れないような所にあつたり、全くお祭りしていないご家庭もあるようです。

生活様式の変化もあり、最近では、神棚やご仏壇の無いご家庭がどんどん増えてきているように思います。住宅を新築される時に洋風が多く

なったため、ハウスメーカーによっては設計の段階から入っていない場合もあります。また、間取りや使い勝手の関係で隅に追いやられたり、省略されていたりしている場合もあります。

このために、神様やご先祖様に感謝して生活をするという習慣が段々なくなってきたように思うのです。

こうして現代は、私たちの生活において神様やご先祖様のお働きを感じたり考えたりする機会が次第に失われています。また、そうしたことに気付くことさえ、難しくなっているように思います。私たちは、自分に興味のあるものしか目に入りませんし、見えていません。このよくな放ったままの神棚ですが、会社には様々な多くの方々が出入りしています。しかし、置き

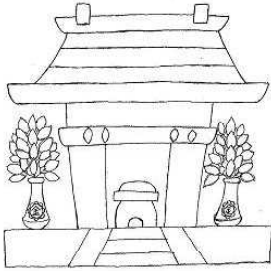
っぱなしにされた神棚の現状は、この方々をお迎えするには誠に寂しく、申し訳ないご表情ではないでしょうか。

子どもの頃、毎朝母に連れられて教会に参拝していた私は、知らず知らずのうちに神様やご先祖様に感謝して生活することの大切さを教えて頂いたように思います。

私たちは、授かっている命や人生を自分だけのものと思いがちです。しかし、その命は計り知れないはるか遠い昔から続いてきたのです。神様から授かり、ご先祖様から受け継いできた命なのです。その掛け替えのない尊い命をありがたく受け止めさせて頂くことが必要だと思います。

そのためにも、神棚に手を合わせ、お礼を申

し上げる日々を過ごすことが大切なのではない  
でしょうか。すると、神様やご先祖様に守られ  
ているという安心感に包まれて、生かされてい  
る幸せを感じることが出来るのではないかと私  
は思います。



## 「金魚の看病」

金光教横須賀教会 木本雅史

私は金光教の教師になった後、二年と三カ月間、東京の新橋にある教会に修行に入りました。

そこでは毎朝、お祈りの前に、お掃除と水撒きと、池の金魚にエサをあげることが日課でした。金魚たちはとてもよく育っていて、私が表で掃き掃除などしておりますと、街行く人が池をのぞいては、「立派なコイですね」とおっしゃいます。私が、「いえいえ、この子らは金魚なんですよ」などと答えると、皆さん大変驚かれます。それほどみんなぷっくりと太って、可愛らしい金魚たちでした。

ある朝、いつものようにエサをあげようとす

ると、一匹の雌の金魚の様子がおかしいことに気がきました。体が風船のように膨れて、うろこが松ぼっくりのように開いています。よたよたと力なく泳ぐその子のおなかを、他の金魚がつついていきます。

丁度産卵の時期で、雄の金魚が雌のおなかを つついて、排卵を促そうとしているのです。その子のことは、以前から、「ちよつと太っているかな」と、気にはなっていました。それは病気の始まりだったのです。弱っている上に、雄の群に追い回され、つかれていては、体力を消耗し、長くは持たないでしょう。

早く手を打たないといけないと思い、師匠である教会長に状況を説明すると、「雅史先生、これも修行よ。この子の看病をして、治してあ

げられたら、あなたはこの子にとって神様になるのよ」と仰いました。

普段から、ずぼらな私は、忙しい時などは植物に水をあげるのを忘れてたり、金魚のエサやりが遅れたり、物言わぬもののお世話の難しさを実感していましたが、こうして私は金魚の治療という修行を始めることになりました。

早速、情報を集めたところ、この金魚はどうも「松かさ病」という病気にかかっているようでした。体が腫れて、うろこが開き、そこからばい菌が入って体に潰瘍かぶが出来てしまう病気で、薬をとかした水や、適度な食塩水で泳がせて、消毒をすると良いようですが、治すのは難しいとのことでした。

私は早速水槽を用意し、薬をとかした水で満

たし、池から金魚を移そうとしましたら、私の気も知らず、彼女はものすごく暴れます。弱った体のどこにこんな力があるのかと驚くほど、縦横無尽に池の中を逃げ回ります。ようやく網で捉えて水槽に移すと、観念したのか、やがて静かになりました。

ところが、その日以降、彼女は全くエサを食べなくなりました。薬や塩も、浴びさせる時間や量を間違えると死んでしまいますから、正確に量らないといけません。緊張する作業でした。

何十匹の中の一匹でしたが、こうして一対一でお世話をさせてもらうようになると、また格別の愛着が湧いてくるもので、私は毎日彼女の病状と、食欲とが気掛かりで仕方なくなりました。ある時などは、うろこの様子を見るために、

床に腹ばいになって水槽をのぞきこんでいたところを師匠が見掛け、私が倒れていると思って驚かれる、といったこともありました。それほど私は金魚のお世話に夢中になっていました。

ところが、そうした私の愛情は、どうも片思いらしく、金魚は相変わらず不機嫌で、気付くと水槽の周りが水浸しになっています。彼女がしつぽで水を飛ばして抗議しているわけです。広い池から水槽に移された訳ですから、当然ストレスもたまっているでしょう。

それでも、あんまり強く飛び跳ねるものから、いつか水槽から飛び出して死んでしまうのではと心配になって、何とかストレスが減るように、水槽の周りを布で覆って刺激を少なくしたところ、次第にエサを食べるようになりま

した。黒ずんで濁っていたうろこの色も、鮮やかなオレンジ色に変わっていき、傷口も塞がり、体型も元に戻ってきました。

しかし、ご機嫌の方は相変わらずで、水槽の水を交換する時はいつもけんかです。看病しているのに、人の気も知らずイライラをぶつけてくる彼女ですが、可愛くて仕方がない。

「親の心、子知らずとはよく言ったものだ」などと考えていた時、ふと、始めに師匠に言われた、「この子にとつての神様になるのよ」という言葉が思い出されました。

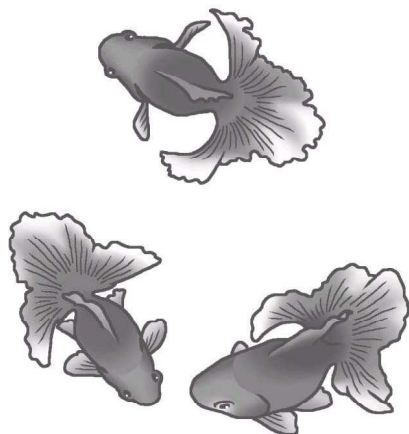
金光教の教祖は、「神様は人を助けることだけを考えておられるから、人の身の上を決して無駄なことはなさない。信心していれば、みな、後には幸せになる」と説かれました。神様



が色々な出来事を通じて人を助けようとしても、人間の側からすると、それは、時につらい出来事であったり、悲しい出来事であったりして、苦しんだり、悩んだりします。

そんな時に、やけを起こしてしまつては、つまりません。万が一、水槽から飛び出てしまうようなことがあつては大変です。そんな時は焦らずに、ゆっくりと深呼吸することも大切です。そうして神様に一切の悩みをお任せして、お祈りをして、問題が解決した後の幸せな姿だけを思い浮かべるのです。出口のない苦しみなどは決してないのですから。

うれしいことに、金魚はその後、健康を回復して、元気に池に戻りました。当の金魚は私の気持ちなど、全く知らないでしょうけど…。



# 「大地に植えたキュウリ」

金光教高蔵教会 田中有希恵

私が小学生だったころの話です。二つ上の兄が学校からキュウリの苗を持ち帰ってきまし

た。小さな植木鉢に植えられたキュウリの苗に小指程の小さな実がなっていました。それは小さな小さな実でしたが、トゲトゲも付いていて、とても可愛いキュウリでした。

このキュウリがどんなに大きくなるだろうかと楽しみに待っていました。でも、何日経っても、それ以上に大きくなりません。「このままでは枯れてしまう、どうしよう」と、私たち兄妹は心配でなりませんでした。

すると母が、庭の片隅の土を掘り起こし、キ

ュウリを植木鉢から庭に植え替えるように教えてくれました。私たちは一生懸命植え替えました。そしたら、どうでしょう。小さかったキュウリが見る見るうちに大きく、立派な、そしておいしそうなキュウリに育ったのです。

私たちのうれしさといったら、それはそれは大きなものでした。母はその大きく育ったキュウリを持って、私たちを金光教の教会に連れて行きました。私の母は、毎日教会にお参りしていたのです。母が教会の先生にこのキュウリの育ったあらしをお話すると、先生は大変喜んで下さり、キュウリをご神前にお供えして下さいました。

私たち兄妹にとっては、大地の働きの偉大さに触れた、初めての出来事でした。けれど、母

にとつてはもつと大きな意味のある出来事だったのです。

私の母は幼い頃に実の母親を亡くしました。

中学一年生の時に新しい母親が来てくれたのですが、母はその新しい義母親ははおやになかなかなじむことが出来ませんでした。反発しながら大きくなり、高校を卒業する頃にはその義理の母との仲は険悪になっていました。

もう家を出たいと思い詰めていた頃、母は金光教の教会のことを知りました。

母は教会の先生に悩みを聞いて頂きました。

親身になって聞いて下さった先生は、「人間には、肉親の親の他にも天地の親神様がいらっしやるのですよ」と話して下さい、その親神様は人間の真の助かりと立ち行きを願って下さって

いること、その親神様の働きを頂いて人間は生かされて生きていることを、優しく丁寧に教えて下さったのです。母にとつては、全く新しい神様との出会いでした。

義理の母との関係についても先生は、「生んでもらつてもない親に育てて頂くのは、当たり前ではありません。どんな小さなことでも、して頂いたらありがたく思わなければなりませんよ」と言われ、そして、「あなたこそ、お義母かあさんに本当の娘と思つてもらえるような娘にならせて頂きなさい」と教えられたのです。

お義母さんのことばかりを問題にしていた母には、その言葉が心に強く響きました。「お義母さんに本当の娘と思つてもらえたら、どんなにいいだろう」と思い、それからの母は教会に

足繁く参拝し、真剣に教えを聞くようになりました。

それから五年が経ち、母はご縁を頂いて結婚することになりました。義理の母がせっせと嫁入り支度を調べてくれ、「式の時には泣けて仕方がなかった」と言ってくれたそうです。母は、その時、「本当の娘にならせて頂けたのだ」と、思わず神様にお礼を申し上げました。

あのまま義母親を憎んで生きていたら、どうなっていたであろうか。母は神様との出会い、先生との出会いに感謝し、ますます信心に励みました。

それから、母は二人の子どもを授かりました。教会の先生から、「自分が育てるということでなく、神様に育てて頂きなさい」と言われまし

た。母は私たち兄妹を連れて教会参拝に励みました。

まだ私が乳飲み子だった時には、私をおんぶして、兄の手を引いて…、大きくなってからは二人の手を握って、一時間以上もかかる道のりを、雨の日も風の日も一日も休まず教会参拝を続けたのでした。

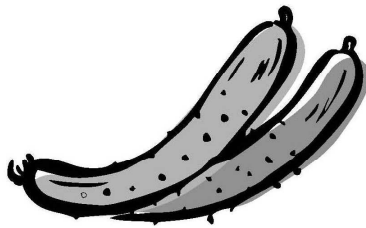
毎日、教会に参拝して、神様に祈り、教えを聞きながら、子どもを育てていくということが、母にとっては、「自分の力で育てるのではなく、神様に子どもを育てて頂く」ということであつたのだと思います。

そんなある日、母は大地に植え替えて立派に育ったキュウリを持って参拝し、ご神前に供えて頂いたのです。大地に植えられてから、人に

食べてもらえるキュウリになったということを通して、母は改めて、「神様に子どもを育てて頂く」と言われた意味を深く悟りました。自分の小さな器、すなわち、このキュウリの小さな植木鉢程の器で子どもを育てるには限界があります。神様に祈り、教えを頂きながらの子育ては、キュウリを大地に植え替えることだったのだと、改めて思ったのでした。

今、私たち兄妹もそれぞれに結婚をし、子を持つ親となりました。私たちも母と同じ願いを持って子育てをしています。世間の価値観に振り回されたり、人と比べたりすることなく、一人ひとりの子どもの特性を伸ばしてやりたいと願い、そして土があらゆるものを吸収して豊かになっていくように、人生の苦難さえも肥やし

にして、明るく元気に生きてほしいと願っています。



## 「海を越えて届いた母の願い」

金光教筑前新宮教会 篠崎道開

私が住む福岡県新宮町は玄界灘に面していて、その海岸には潮の流れにのって、東南アジア諸国からヤシの実が流れ着きます。このヤシの実はどこか南の島で育って、風で落ち、潮の流れにのってやって来たのだな、「長旅お疲れ様」と声を掛けたくなります。

また、中国、韓国から生活用品なども流れ着き、海岸の掃除をしながら、少し前までは誰かのお役に立っていたのだ、ご苦労様でしたとお礼を言い、拾っています。

私が幼い頃のことです。母はよく私を自宅から歩いて数分の浜辺に連れて行き、こんな話を

してくれました。

「あなたは将来、進学や仕事でよそへ行き、そこでつらい思いをして助けて欲しいと思う時があるかもしれないね。でも、あなたがどこへいても、神様は付きまといつて助けて下さるからね。助けてほしい時には海へ行きなさい。お母さんはあなたのことを、そして世の中の人々のことをこの海に向かって願っているからね。この海は日本中、そして世界中の国々につながっているから、お母さんがここから祈っていることを覚えておいてね」と、幼心に母の強い願いを感じていましたが、時と共に、いつしか忘れていたのです。

それから二十年後、私は金光教の教師となり、単身、海外布教の仕事で南米のパラグアイ共和

国へ派遣されたのです。当初は、やる気満々で、どんなことも受け入れ、何でもやれると意気込んでいました。

しかし、いざ現地で生活を始めると、言葉や習慣の違いに戸惑い、悩みやつらさを聞いてくれる友達もいなくて、現地の方々に布教していることの厳しさと自分の未熟さ、生活をしていくことの大変さを思い知りました。

そんな生活が二年ほど続き、だんだん精神的にも落ち込んでいき、一週間誰とも会話をしないこともありました。仕事にも行き詰まり、帰国することも考えていたある日、ふっと海を見たくなりました。

しかし、パラグアイは南米の内陸国で、海へ出るには東の大西洋か西の太平洋のどちらに行

っても千五百キロは離れています。私はチリ行きの長距離バスに乗り、ひたすら西へ向かいました。車内で出会ったチリ人の青年は、チリで捕れた魚をパラグアイまで運ぶ仕事をしていました。彼は、「日本の技術提供で養殖をしているサーモンは最高においしいよ！ これも日本のおかげだ！」と笑顔で語ってくれました。

バスの移動は三十六時間。道中、荒涼とした大平原や広大な塩の湖を渡り、一面に広がる小麦畑や大豆畑を、大きなコンバインで収穫をしている風景を見ると、この大豆たちは日本へ行くんだらうなど古里を思い出しました。

ワイン産地のぶどう畑を抜け、しばらくするとアンデス山脈にある南米最高峰の山が見える国境を越えて、港町へたどり着きました。潮の

香りが漂う港には、漁を終えたたくさん船が泊まっています。初めて見る景色でしたが懐かしい感じがしました。

山の方を振り返ると、バスで通ってきたアンデス山脈の真っ白い雪が夕日に照らされ真っ赤に染まっています。そして目の前には、どこまでも穏やかに広がる青い太平洋があり、この大海原の水平線のずっと先に、日本があるんだろうなと思いました。もしかしたら日本が見えるんじゃないかなと、何度もその場で飛び跳ねてみましたが、見えるはずありません。

しばらく、ボーツと海を眺めていると、突然、二十年前に新宮の浜辺で母が幼い私に話してくれた言葉が思い出されたのです。ああ、今も母はあの海から私のことを願ってくれているんだ

ろう。そしてその母の願いは、太平洋を渡り、私が今立っているこの南米の海岸まで流れ着いているのだと気づきました。

「自分がどのような状況におかれていても、世界中どこへ行っても、神様は見守ってくれている。そして母から祈られている自分がいる。祈りの中に私はいるのだ」と。

これ程心強いことはありません。私はこうして、思いを新たにすることが出来たのです。

現在、南米赴任の任期も終わり、今は福岡県の教会で仕事をさせて頂いています。二歳になる娘と一緒に近くのスーパーへ買い物へ行く時、娘は知っている商品や野菜や魚などを見つけて、大きな声で自慢げにその名前を言っています。



店内に並んだ商品の原材料の生産国や加工国を見るとアメリカ、中国、東南アジアはもとより、南米、ヨーロッパからというものまであります。遠くの国の誰かが育て、加工をして、多くの人の手を経て、ここまでやってきているのです。

私は娘に、「これは海の向こうの遠い国からやってくるんだよ。ご苦労様って言いたくなるよね」と話します。なぜならば、これらの商品を見ていると南米パラグアイで出会った人々のことを思い出すからです。

時々、私は浜辺へ行き、海へ向かって、いろんな国で出会った人々のことをお祈りします。すると、みんなの懸命に働いている姿と笑顔が浮かんできます。

そして、母もずっとここから私のことを祈ってくれていたんだ、と改めてありがたく思えます。母には及びませんが、幼い娘をはじめ世の中の人々のことをこの海から願っていきたいと思います。





**金光教本部 ラジオ放送係**

**住所** 〒719-0111  
岡山県浅口市金光町大谷320

**電話** 0865-42-6453

**FAX** 0865-42-2114

**メール** [w-master@konkokyo.or.jp](mailto:w-master@konkokyo.or.jp)

# KONKOKYO

北海道放送 土曜日 あさ5時10分  
東北放送 日曜日 あさ5時00分  
ニッポン放送 日曜日 あさ4時30分  
東海ラジオ放送 金曜日 あさ5時25分  
和歌山放送 日曜日 あさ6時50分  
朝日放送 水曜日 あさ4時50分  
山陽放送 日曜日 あさ6時35分

中国放送 土曜日 あさ5時50分  
南海放送 日曜日 あさ6時00分  
RKB毎日放送 日曜日 あさ6時50分  
宮崎放送 日曜日 あさ7時10分

ここで聴くおはなし

検索

